萬葉集古義

十四上天

16
125
96

萬葉集古義

十四上天

東京圖書館
門 類 一六函 架 九六號 二三五冊

2071/24

東語ハ想て雅言と異れるゥへ、陸奥蝦夷などの詞ハ、殊ゴいやーくつゴなくーて、京人の耳ゴハ、分ぬゴこのりー故ゴ。

萬葉集古義十四巻之上

土佐國　藤原雅澄撰

東歌（アヅマウタ）

東歌ハ東國（アヅマブリ）風歌なり。阿豆麻（アヅマ）といふ由縁ハ、古事記、書紀、倭建命の御故事ゴ、委くー見えゴり。さて古ハ、東國ハ、人の風俗言語等、何ゴ皆異様なりけれバ、殊ゴ東某ことわれるなり。東人（アヅマヒト）、東男（アヅマヲトコ）、東女（アヅマヲミナ）、東賢子（アヅマワラハ）、東語（アヅマコトバ）、東屋（アヅマヤ）、東琴（アヅマコト）など云るこの如ー

譯語(カサ)て事を通ぜ(ず)ことなり。三代實錄三十九ゟ元慶五年五月三日庚戌。授陸奥蝦夷譯語(ヲサ)外從八位下。物部斯波連永野外從五位下。とあるを合考べし。此ハ陸奥ゟ置れし蝦夷の通辭なり。蝦夷なれば詞の通ぬはずなり

雜歌(クサグノウタ)

此標題ハ必(ス)あるべきを舊本ゟハ脫しなり。拾穗本ゟ從つ。次々ゟも。相聞。譬喩歌。雜歌。挽歌など標せる例なれべなり

奈都素妣久(ナツソビク)。宇奈加美我多能(ウナカミガタノ)。
於伎都渚爾(オキツスニ)。布禰波等杼米牟(フネハトヾメム)。

佐欲布氣爾家里(サヨフケニケリ)。

奈都素妣久(ナツソビク)ハ。枕詞ゟて。魚釣緡挽(ナツソビク)といふことなり。七巻十五丁ゟ。出て。彼處ゟ。妥注せり。其歌も。夏麻引海上滷(ナツソビクウナカミガタ)乃奥津洲爾鳥者簀竹跡君者音文不爲(ノオキツスニトリハスダケドキミハオトモセズ)とあり。本句ハ。今と全同じ○宇奈加美我多(ウナカミガタ)ハ。和名抄ゟ。上総國海上(ウナカミ)郡と(加美郡)ある海の潟是なり。海上(ウナカミ)のことハ。七巻上八十七丁。九巻下四十五丁等ゟ。既く妥云り○於伎都洲(オキツス)ハ。澳中の洲なり○佐欲布氣爾家里(サヨフケニケリ)ハ。三巻十九丁ゟ。吾船者枚乃湖爾榜將泊(アガフネハヒラノミナトニコギハテムオキヘ)。奥部莫避左夜深去來(ナカリサヨフケニケリ)とあるゟ同じ○歌意かくれ

たるをぢなし。

○畧解に、こゝに載たる五首の中、初二首と末一首は、東風ならば、京人の、東國の司などにて下りたるが、よめるなるべし、と云るは、甚偏なる論なり、いかにとなれば、凡て古に東人の歌よみけむことは、たとへば今、世に琉球人などの歌よむごとくにそ有けむ、そは琉球人の皇朝學に未熟が彼國の語にてよみ、とゝのへたるは、むげにつたなくて聞えがたきふしいと多かるを、そが中に皇朝學にやゝ長たるがよめるは、皇朝人の歌にをさ〱おとらぬも多きが如し、されば古の東人も雅言をよく學び得たる人は、猶京人の作にも立おくれざりしなり、かゝれば、こゝの初二首末一首のみならず、凡て東歌の中に京人のと異なることなきが多かるは、さる故にこそありけれ、此、下二十七丁に、美蘺良由久君母爾毛我母奈、云々、又三十二丁に、阿遅乃須牟須沙能伊利江乃、云々、又三十三丁に、安里蘺夜爾於布流多麻母乃、云々などの歌は、何も京人のにおとれるふしなし、猶此類許多なり、又殊に三十四丁三十五丁に防人歌を五首載たる、皆がらいと詞うるはしくて、京人のにもめづらしきでありなり、二十巻二十七丁、常陸國那賀郡、上丁大舎人部千文歌に、阿良例布理可志麻能可美乎伊能利都都須米良美久佐爾和例波伎爾之乎、又二十九丁、下野國梁田郡、上丁大田部三成歌に、奈爾波刀乎已岐埿豆美例婆可美佐夫流伊古麻多可禰爾久毛曽多奈妣久、又三十五丁、主帳埴科郡神人部子忍男歌に、知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里伊波負伊能知波意毛知知我多米、など猶多けれど、今は其中にも殊に秀れたるを一二摘出ていふなり、かく正しく生ぬけの東人にも、京人にをさ〱おとらざるうたよみの有しにて、凡て東にも勝たる劣たるありて、必東語ならぞとて、東歌にあらずと思ふは、いと〱かたくなゝりけり、猶たとへて云ば、後世に古風の歌よむも志あり、なべて世の古風を學ぶ人の作を見るに、多くは後世語のまじりなど、いとつたなきを、又それが中に古を熟學び得たる人の多くよみたる中には、又まれ〱、此萬葉などにも入べきぞとの歌もあるが如し、

右一首上總國歌

可豆思加乃。麻萬能宇良未乎。

許具布禰能。布奈妣等佐和久。

奈美多都良思母。

宇良未、宇、舊本末ハ、浦田なり。既〳〵一巻ヨ具注リ○歌意かくれさるすぢなし〳〵。七巻二十一丁ヨ。風早之三穂乃浦田乎擕舟之船人動浪

立良下。とあるヨ同じ

右一首下総國歌

筑波禰乃。爾比具波麻欲能。伎

奴波安禮杼。伎美我美家思志。

安夜爾伎保思母。

爾比具波麻欲ハ。新桑蠶なり。和名抄ニ。唐韻云。蠚桑蠶。即桑蠶也。和名久波万由と見ゆ。蠶ハ春夏飼ふを。これハ先春をゞめてかひさる蠶の衣をいふなり。貫之集ニ。ことしおひの新桑まゆのゝら衣。千世をこのけてそいをひそめつる。現存六帖ニ。平重時朝臣。あぢきなく物ハ思ハゞ賤ゞのわに。新桑まゆのうちまくるゝ。○伎美我美家思志ハ。君之御衣なり。十巻三十丁ニ。公之御衣爾とある處ニ具云り。志ハ。その一ト。そぢなる事を。重〳〵思ふる辭ニて。此ハその一ト。そぢニ著欲〳〵思ふよしを。あらせさるなり。○安夜爾伎保思毋ハ。あやゝしきまでニ著まゐ〳〵きて。毋ハ歎息辭なり。○歌意ハ。筑波嶺の新桑蠶のよき衣ハあれども。其をバ著さゝも思ふぞ。君ゞの御衣のあやゝしきまでニ。さても一ト。そぢニ著まゐ〳〵き事やとなり。○舊本ニ。或本歌曰。多良知禰能。又云安麻多伎保思毋とあり。此發句ハ誤れるなり。多良知禰ハ。母といふまかゝる古言の例なれバなり

筑波禰爾。由伎可母布良留。伊奈乎可母。加奈思吉兒呂我爾

努保佐波可母。

由伎可母布良留ハ。雪の所零まて。母ハ歎息辭なり。○伊奈乎可母ハ。否歎諾歎と云の如し。母ハ歎息辭なり。俗ま。さうでであるまいの。さうであらうのと云まこらハ同じ。十一十七丁ま。相見者千歳ハ去流否乎鴨我ハ然念待公難爾○加奈思吉兒呂我は愛憐兒等之なり○爾努保佐流可母ハ。布所暴のなり。此下二十七丁ま。美夜麻乎左良奴爾努具母能とよめり。布雲之なり。母ハ。これも歎息辭なり○歌意實ハ筑波山ま雪の零るを見てよめるなるべけれど。表まハ。雪の

ふれるの。いな然まてハあるまじきの。然まてあらむの。もし然まてあらむぞハ。美しき女の布を干さるまて。あらむの。さても見事のけしきやと。打見さるまゝま疑ひて云るなり。初まハ。雪のふれるならむのとおもひて。中まハ。雪まてあらむの。其まハあるまじきのと疑ひ。終まハ。布わせるならむのと。おもひてのりさるさまて。いとをのしきこゝろぞえなり。畧解ま。曝布ま。さとへさるなりと云るハ。いさゝらさごのへり。さとへさる意ハ。さらまなきをやミギノフタウタハヒタチノクニノウタ

右二首常陸國歌

信濃奈流須我能安良能能爾保

登等藝須。奈久許惠伎氣婆。登

伎須疑爾家里。

須我能安良能ハ。信濃地名考ニ。野史ニ曰。大宍持命。巡行此國。到坐阿羅野云々。今伊奈郡阿智川の南ニ。菅野村ありと云り。其處なるべし〳〵。○歌意ハ。春の末のぎりに逢むと。人ニ約り置〳〵を。得逢ぞ〳〵て。夏來て霍公鳥の音ニ驚きて。彼の鳴を聞バ。契り〳〵時ゑや過ニけりと云るなり。畧解ニ。旅ニありて。とく歸らむことを思ふニ。郭公の時まで猶在を愁とるまて。意も調も。京人の任などまて。よめりけむと云るハ。おゝあてごとなりミギノヒトウタハシナヌノクニノウタ

右一首信濃國歌

相聞シタシミウタ

阿良多麻能。伎倍乃波也之爾。

奈乎多氐天。由吉可都麻思自。

移乎佐伎太多尼。

阿良多麻能ハ。枕詞なり。遠江國麁玉郡あれど。其郡ハ伎倍てふ地なし。されバさゝ枕詞なりと云り。十一十六ハ。璞之寸戸我竹垣とある處ハ。具注り○伎倍乃波也之ハ。和名抄ハ。遠江國山香郡岐階とある。階字ハ。陛の誤ハて。伎倍ハ是なるべしと本居氏云り。其處ハある林なり。○奈乎多氐天ハ。汝を令立而なり○由吉可都麻思自ハ。自字ハ。目の誤なり。行難まゝまて。目ハ歎息辭なり○移乎佐伎太多尼ハ。稻掛大平云。乎字ハ。毛の誤なるべし。妹先立ねなり○歌意ハ。本居氏。これハ男の旅立行時。妻の伎倍の林まで送來ぬるを別るゝ時。男のよめるなりと云る如し。伎倍の林ハ。汝を立留らせ置て別れ行バ。さてハ得行あへじ。妹ハ立とまらぞして前立てゆけのし。さらバ吾ハ共ハ行むそとなるべし

伎倍比等乃。萬太良夫須麻爾。

和多佐波太。伊利奈麻之母乃。

伊毛我乎杼許爾。

萬太良夫須麻は、斑衾なり。集中は、斑衣とよめり。萬太良は、字鏡は、踏、色雜不同也。萬太良爾と見ゆ○和多佐波太は、綿多なり。佐波太は、多と云は同じ。岡部氏の、太は爾の誤なりと云るはあらじ。此下十丁は、安比太欲波佐波太奈利努乎とよめり。さて此までは、衾は綿を入るを云て、入といむ料の序なり○伊利奈麻之母乃は、入なまし物をなり。物をといふべきを、物とのみ云ること、古歌は例多し。既く云り○伊毛我乎杼許爾は、妹の小床なり○

歌意かくれる

るをぢなし

右二首遠江國歌

安麻乃波良。不自能之婆夜麻。

己能久禮能。等伎由都利奈波。

阿波受可毋安良牟。

安麻乃波良ハ。此山極めて高く空よかゝれる如く見ゆれば。天原とハ云り。都氏富士山記ヨ。峯如削成直聳而屬天と云る如し。新古今集春上ヨ。天原富士の烟の春の色の。霞よなびくあけぼのゝ空○不自能之婆夜麻ハ。富士之柴山なり。富士の半より下の小木の生志げりゝる處を云○已能久禮能ハ。木之暗之なり。本居氏の。上ノ二句ハ。このくれの序のみ。木之暗を。此暮よいひのけゝるなりと云るハわろし。木之暗を。此暮よいとを。古風よあらば○等伎由都利奈波ハ。時依移なり。由都流といふ言意ハ。由ハ依ヨて。さとへバ中ヨある物の。本まさハ末の方ヨ依て移る謂なり○歌意ハ。富士の柴山の繁く生なびきて。木暗き折ゝも。こゝの隱妻を率て立隱るべきなれば。此時節を過ゝてハ。さることも叶ひがゝさければ。逢ビなりなむこの。さてもくちをゝやとなり。岡部氏の。木之暗道の越がゝき間ヨ。時過むこのといふ意ヨ見ゝハ。違へり。

四巻二十丁大伴坂上郎女歌ヨ。佐保河乃涯之官能小歴木莫刈鳥。在乍毛張之來者立隱金

不盡能禰乃伊夜等保奈我伎。夜麻治乎毛。伊母我理登倍婆。

氣爾餘婆受吉奴。

伊母我理登倍婆ハ。妹許と云べなり○氣爾餘婆受吉奴ハ。岡部氏云。氣ハ息。爾餘婆受ハ不呻吟なり。妹ゐ許へ行と思ふ心より。山路をおほえぶして來ぬといふなり。本居氏ハ。氣ハ長氣など云氣なて。日を經るまで及ぶ。いそぎて來ぬといふのと云り ○歌意ハ。常ハ息づき呻吟て。難儀して越來なるを。妹許へといへば心空なて。彌遠長き山路をも。息づき呻吟ずして越來ぬるよとなり

可須美爲流。布時能夜麻備爾。
和我伎奈婆。伊豆知武吉氐加。
伊毛我奈氣可牟。

夜麻備は。山傍なり。山邊と云むゐの如し○歌意は。霞の立覆へる富士の山邊よ。えるゐ〜わのれて吾ゐ來さりなゞ。そこと見ゆまじきなれば。何のかゝへ向ひてゐ。妹ゐのなげのむとなり。此下二十二丁よ。宇恵多氣能毛

登左倍登與美伊伊弖伊奈婆と
ありて、末句ハ、今と全同歌あり

佐奴良久波。多麻乃緒婆可里。
古布良久波。布自能多加禰乃。
奈流佐波能其登。

佐奴良久波ハ、夫妻共相宿をることハと云ごの如し。
多麻乃緒婆可里は、短きを譬云て、さゝ暫の間のこと

なり。古布良久波ハ、戀〳〵思ふ事ハといふごの如し。
奈流佐波能其登ハ、如鳴澤、なり思の鳴澤の鳴さわ
〳〵ごとく湧返るとなり。鳴澤ハ、此山のいさゞきよ大
なる澤有て、むかし山のもゆる火の氣と、其澤水と相
對て、常よりき返り、鳴響む音の高かりしゆゑよ、鳴澤
といへるとそ。歌意かくれさるをぢなし。古今集よ、
逢事ハ玉緒計名の立ハ、吉野の川の瀧津瀬の如、伊勢
物語よ、逢事ハ玉緒許おもひえて、つらき心のなごり
見ゆ
らむ

或本歌曰。麻可奈思美。奴良久思家良久。佐奈良久波。伊豆能多可禰能。奈流左波奈須與。

奴良久思家良久。奴良久の下。舊本よハ波字あり。一本ハ无よろし。家字ハ。末の誤なるべし。おゝ草書似たり。ヌラ。ク。シ。マ。ラ。ク。と訓べし。○佐奈良久波佐。字。舊本よハ。佐奴良久波といふなし。一本ハ從ハ。佐奴良久波といふよ同じ。○伊豆能云々奈須與ハ。走湯の事なりと云れど。鳴澤と云ること。聞え來ざることなり。此歌ハ。右の歌を闇誦誤りしものと見えたり。奈須與ハ如よなり。與ハ。歎息の聲よて。次歌よ。奈須毛とある毛よ迫し。

一本歌曰。阿敝良久波。多麻能乎思家也。古布良久波。布自乃多可禰爾。布流由伎奈須毛。

多麻能乎思家也ハ。玉の緒〳〵やなり。俗よ。何〳〵といふハ。みなそれめく〳〵といふ心なれバ。玉の緒めきて。こゝのなる心なりと契沖云り。岡部氏云。遠江などの人物の形をゝとへ云よ。山をけよ成てなど云るハ。山の次なり。是を思ふよ。玉ノ緒次哉よて。それよついづる意ときべしと云り。考

合スベシ

○布流由吉奈須毛は、零雪の如く、常止ぞ、

さても戀〳〵思ふそとなり、毛ハ歎息辭なり

駿河能宇美。於思敝爾於布流。

波麻都豆良。伊麻思乎多能美。

波播爾多我比奴。

於思敝爾於布流ハ、磯邊ヨ生るなり、磯邊を、東語ヨ於思敝と云り、下九丁ヨ、麻末乃於須比爾奈美毛登杼呂爾

とあるも、眞間之磯邊ヨなり○波麻都豆良良ノ字、舊本夜ヨ誤、今ハ古寫一本ヨ從つ、既く契冲も、夜ハ良の誤なりといへり、ハ、品物解ヨ云○伊麻思乎多能美ハ、汝を頼なり○波播爾多我比奴、舊本ヨ、一云、於夜爾多我比奴とあり、何れヨもあるべし、母の心ヨ背、違ぬなり○歌意ハ、契冲云、濱つゞらの如く、汝ごの吾ヨ絶ぬ心をさのみて、母おこと人をむのへさせむなどいふをうけひのぞして、心ヨ背けるといへるなり

右五首駿河國歌

伊豆乃宇美爾。多都思良奈美
能。安里都追毛。都藝奈牟毛能
乎。美太禮志米梅楊。

第一二句ハ序なり。契沖。ちらなみのありつゝとつゞけるまハあらぢ。つぎなむものをとつゞくるなり。浪のあとより立つゞくまよせて。あり〳〵て後まも。心ざまかたらびハ。繼て逢見む物をと云なり。と云る

如〳〵○美太禮志米梅楊ハ。將亂始哉なり○歌意ハ。あ
りありて繼て相見む物を。得忍ひぢ〳〵て亂初むやハ。
よ〳〵堪て心を亂さじとなり○舊本ハ。或本歌曰。之良
久毛能多延都追毋都我牟等母倍也美太禮曽米家武
と注せり。此意ハ。絶なゞらまも。又繼て逢むと思ハや
ハ。又逢むとハ思ハぬ。されバまや。かく亂れそめけむ
といふな
るべ〳〵

右一首伊豆國歌

安思我良能。手氐毛許乃母爾。
佐須和奈乃。可奈流麻之豆美。
許呂安禮比毛等久。

手氐毛許乃母へ。彼面此面なり。十七四十六丁ゟ。安之比奇能手底母許乃毛爾等奈美波里○佐須和奈乃ハ。刺羂之なり。和名抄ゟ。周易云。蹄者所以得兎也。故得兎忘蹄。師説。和奈。神代紀下ゟ。時有川雁嬰羂困厄。神武天皇紀ゟ。于儀能多伽機珥辭藝和奈破蘆。古事記ゟさて此まで。可奈流麻を之豆美といひ係さる序なりさるは獵者などの羂刺ゟへ。人音かまびそ〳〵くてハ。鳥獸の懼てより來ぬ故。物音ちづめて。ちのひ〳〵ゟ物そる故。か〳〵いへるなり。次ゟ引二十卷なるハ。數多の健士の弓矢手挾て向ひ立る時ゟ。弓弭などの鳴さわくを。可奈流麻といふへ。いひかけさるゟて。彼ハ囂鳴を主と〳〵。此ハ靜を主と〳〵て云續さるとの差別ありて。いさゝの異れり。諸説皆いのゞなり○可奈流麻之豆美ハ。囂鳴間靜なるべ〳〵。可奈流ハ。囂〳〵鳴響をいふべ〳〵。字鏡ゟ。譆

加万加万志。麻加万志。又常ゴ。加志万志とも。加万妣須志とも云。俗ゴやのまゝとも云り。二十巻四十ゴ。阿良之乎乃伊乎佐太波佐美牟可比多知可奈流麻之都美伊涅豆登阿我久流○許呂安禮比毛等久は。兒等と吾と共ゴ紐解て相寢るとなり○歌意ハ。夜更て囂ゝき人音をあづめて後。女と吾と共ゴ紐解て。あめやのゴ逢寢る

よとなり

相模禰乃。乎美禰見所久思。和須禮久流。伊毛我名欲妣氏。吾乎禰之奈久奈。

相模禰は。今大山とて。雨降神社のある山なるべゝと云り。さて和名抄ゴハ。相模佐加三とあれども。其ハ後ゴ轉れる唱ゴて。古は佐我武と呼ゝなり。古事記ゴ。相武國と書ゴ。模字を書るも。ムの假字なり。又東遊の一歌ゴ。左加安禮乃於禰とあるも。相模の峯といふことなるべゝと本居氏云り○乎美禰見所久思ハ。小峯見

過しなり○和須禮久流へ相撲峯を見過しをるゝ來て漸々妹の事を忘るゝなり○吾乎禰之奈久奈は令吾泣哭なり之へ例のその一をぢなる事を重く思をる助辭なり尾の奈へ戀む奈けら〳〵奈などいふ奈は同じ〳〵て奈何と歎きをてとる辭なり畧解などは此の奈を莫の意は見て我は泣しむることなのれといふ意そと云るは甚誤なり次の或本歌は奈久流とあるは令泣の意はて同じ此下十九丁は奈勢能古夜等里乃乎加耻志奈可太乎禮安乎禰思奈久與伊久豆君麻氐爾又二十一丁思麻良久波禰都追母安良牟乎伊米能未爾母登奈見要都追安乎禰思奈久流二十

巻四十三丁は先太上天皇御製霍公鳥歌は富等登藝須奈保毛奈賀那牟母等都比等可氣都都母等奈安乎禰之奈久母などある皆同じ岡部氏の寢〳〵無のらする○なりと云るへ甚非なり

歌意へ旅は出立て家道をるゝ遠放り來て戀〳〵く思ふ妹の事をも漸〳〵忘るゝわとなるは同旅行の中より妹の名を呼て又〳〵も吾は哭を泣〳〵むるなあと歎きゝるなり

或本歌曰武藏禰能乎美禰見可久思和須禮遊久伎美

我名可氣氏。安乎禰思奈久流。

武藏禰ハ、秩父山をいふなるべし。武藏は、武射志と射を濁わ唱なり。なお次よいふ

和我世古乎。夜麻登敝夜利氏。麻都之太須。安思我良夜麻乃。須疑乃木能末可。

麻都之太須ハ、令待慕といふの、都ハ知を通ハし、太ハ多波の縮りなるなり。されば夫の方より、吾を待慕ハしむる謂ゝ云るなるべし。契沖の、まつしさにハ、まつたつなり。まつしハ、まぶしなり文選潘安仁躰雑賦云、爾乃婆娑場挂翳停僮葱翠、鳥けゞ物をかるものゝ、まぶしさしてうかゝふごと〻、足柄山の杉の木のまより、今や歸るとみれば、杉の木の間を、まつしをさつるといふなりといへるハ、いとゝろし、翳ハ、鳥獸をうのねらふ人の立のくるゝ料のものゝまこそあれ、人を待ゝよゝしなきてとなり、又岡部氏ハ、松ゝ待をそへしまて、ゼこを常ゝ待望む杉の木の間なれば、この杉をば松といふべきのなりと云れど、さる意と〻もきこえがさし。○須疑乃木能末可ハ、榲之木際哉なり、足柄山ゝハ、古、杉の大木多〻ありて、船などゝ造りしなり。今も埋杉とて掘出そとなむ、彼、矢立の杉と云

〳〵も、此山のなり○歌意は、夫君を都へ上遣てより、歸り來まれを、今や〳〵と、足柄山の木際より、待慕ひ望まし〳〵めつゝある杉の木哉、と云るまや、杉は木際より望むよ〳〵を主と〳〵て云るを、故に杉のおとゝざの如〳〵云な〳〵るの、二巻十三丁に、吾勢枯乎倭邊遣登佐夜深而、鷄鳴露爾吾立所霑之、古今集東歌陸奥歌に、吾勢子を都に遣て鹽竈の、籬の島のまつそ戀〳〵き

安思我良能。波姑禰乃夜麻爾。

安波麻吉氏。實登波奈禮留乎。

阿波奈久毛安夜志。

安波麻吉氏は、粟種而なり、逢を云む料なり、三巻四十二丁に、千磐破神之社四無有世伐、春日之野邊粟種益乎、十六十九丁に、成粟寸三二粟嗣云々、これら粟は、逢をそへゝり○實登波奈禮留乎は、事は成就〳〵る物をといふなり○阿波奈久毛安夜志は、不逢事も恠〳〵の意なり○歌意は、箱根山に粟を種て、實とはなれる物を、粟のなきの怪〳〵

と表よ云て、さておもひをのけてかとふるまゝよ、人
も許容て實よいもとせのかさらひをなせる物を、な
ほとて滯りてあもぬことそと、裏よ怪しみ思ふよし
を、粟もて爲立さるなり○舊本よ、或本歌末句ニ云、波布
久受能比可利與利已稱思多奈保那保爾と注せり、比
可利與利已稱は、所引依來ねなり、利字、官本よは波と
作り、さらバ引者依來ねなり、思多奈保那保爾ハ、思多
ハ、下思、下延の下よて、隱々よ物をるを云、奈保那保ハ、
五、巻七丁よ、比佐迦多能阿麻遲波等保斯奈保奈保爾、伊
弊爾可弊利提奈利乎斯麻佐爾とある、奈保奈保よ同

ど〜て、質直よ黙止をて平隱なる意なり、蔓菁のもつ
れ亂るゝことなく、さやを〜吾方よ依來れあ〜と希
ふな
り

可麻久良乃。美故之能佐吉能。
伊波久叡乃。伎美我久由倍伎。
己許呂波母多自。

可麻久良は、和名抄ゑ相摸國鎌倉郡加万久良○美胡之能佐吉ハ、相摸國風土記ゑ、鎌倉郡見越崎毎レ有二速浪崩石一、國人名号伊曾布利一、謂振石也○伊波久叡乃ハ、石崩之なり、悔をいもむ料の序なり、石崩ハ、風土記の説の如し、仁德天皇紀、播磨國造祖速待歌ゑ、瀰箇始報破利摩波椰摩智、以播區椰輸伽之古俱等望、阿例椰始儺破務○歌意ハ、君ゐ後ゑ悔べきやうの心をべ持ゐ、堅く頼み給へとなり、三卷四十九丁ゑ、妹毛吾毛清之河乃河岸之、妹我可悔心者不持、十卷五十八丁ゑ、雨零者瀧都山川於石觸、君之摧情者不持

麻可奈思美。佐禰爾和波由久。
可麻久良能。美奈能瀬河泊余。
思保美都奈武賀。

美奈能瀬河泊余ハ、余ハ從ゐて、爾といいもむゐの如し、蘆邊ゑ滿來るといふべきを、從二蘆邊一滿來塩之とよめるゑ同例なり、既〻具云り、さて今も、常ハ水乾て潮滿時は、高浪の立川鎌倉ゑ有と云り、其川を渡て、妹許へ

可麻久良は、和名抄に相摸國鎌倉郡加万久良○美胡之能佐吉へ、相摸國風土記に、鎌倉郡見越崎毎有速浪崩石、國人名号伊曾布利、謂振石也○伊波久叡乃へ、石崩之なり、悔をいたむ料の序なり、石崩へ、風土記の説の如し、仁德天皇紀、播磨國造祖速待歌に、瀰箇始報破利摩波挪摩智、以播區挪輸伽之古倶等望、阿例挪始儺破務○歌意へ、君の後に悔べきやうの心をば持じ、堅く頼み給へとなり、三卷四十九丁に、妹毛吾毛清之河乃河岸之、妹我可悔心者不持、十卷五十八丁に、雨零者瀧都山川於石觸、君之摧情者不持

麻可奈思美。佐禰爾和波由久。
可麻久良能。美奈能瀬河泊余。
思保美都奈武賀。

美奈能瀬河泊余へ、余へ從にて、爾といたむの如し、蘆邊に滿來るといふべきを、從蘆邊滿來塩之とよめるに同例なり、既に具云り、さて今も、常へ水乾て潮滿時は、高浪の立川鎌倉に有と云り、其川を渡りて、妹許へ

通ふ人の歌なり○思保美都奈武賀ハ汐滿らむこのなり良武といふべきを東語まハ奈武と云り次々まゆ○歌意ハ心愛しさまハ堪のねて其女と相宿せむとて吾ハ行なるまに其行路の美奈の瀬河まに今ハ早潮滿來て渡りがさのらむこの

おわつのなしやとなり

母毛豆思麻安之我良乎夫禰

安流吉於保美目許曽可流良

米己許呂波毛倍杼

母毛豆思麻ハ百津島まて數多の島を云八十島など云るこの如し さて此句ハ巡行多をいえむ料なり○安之我良乎夫禰ハ足柄山の材まて造れる船なり三卷四十丁まに鳥總立足柄山爾船材伐と見え又足柄山の杉を伐て船まに造れるまその足のいと輕のりけれバ山の名となれるまし風土記まに見えたり○安流吉於保美ハ歩行多みなり かなる此方まあるき行方の多き故まの意なり○目許曽可流良米ハ男の目こそ疎ら

めとなり○已許呂波毛倍杼へ心よへ思へどなり七
巻四十丁よ水霧相奥津小島爾風乎疾見船縁金津心者
念杼とあり○歌意契冲云これへ女の歌よてこれへ
かゝ二心なゝおもへど男へ心のこゝろきものよてこ
なゝかれゝよ心をこのけてゆゝこのゝのおわき
故よめこそかるらめとなり畧解の説へ聞とりでゝ

阿之我利能。刀比能可布知爾。
伊豆流湯能。余爾母多欲良爾。

故呂何伊波奈久爾。

阿之我利へ足柄なり東語よへ足我良とも足我利と
も云るなり○刀比能可布知へ足柄下郡の土肥の河
内なり土肥の杉山など云て伊豆よ交れる所よ今湯
河原と云村よ湯ありと云り○伊豆流湯能此までへ
多欲良を云む料の序なり伊豆流湯へ和名抄よ温泉
和名由とあるの如し○余爾母多欲良爾とへ余爾母
へ世よゝ嬉しき世よゝ悲しきなどいふよ同じ語な
り多欲良へ多欲良多由良共よ多由多といふよ通ひ

て、其多由多ハ、七巻三十四丁ニ吾情湯谷絶谷浮蓴邊毛奥毛依勝益士とある如く、動揺と漂蕩て、彼よもよらびこ此よもよらびこ心の定まらぬをいふ言なり、かくて上よりのつゞきハ、温泉の不足事なく、多く満湛へて寛なる意ニいひかけたるなり、俗にさつぷりといふ意なり、多欲良を、満湛へて寛なる事ニ云ハ、即由多といふをも、動揺と漂蕩ふ事ニも、寛大にして、不足てとなきニもいふと、同例なるを思ふべし、本居氏ハ、多欲良ハ、俗言ニ丈夫ハ、湯の丈夫ニ多き意、歌意ハ、あやふのらず丈夫ニよと云意なり、上よりのつゞきしのなる意なり、妹ゐの丈夫ニよいをぬを、あやふがるなりと云れど、いゐゞ○歌意ハ、動揺と漂蕩ひて、彼よもよらびこ此よもよらびこ心を定めぞして、世ニ危ふく、末おわつのなく女のいをゞこそおれ、さハなくして、さしのにかさく吾といひかへしたることなるに、今更ニ何を疑ひて、かくさまく物思をびそらむと、自我心を制めさるなるべし、此下十丁ニ、筑波禰乃伊波毛等杼呂爾於都流美豆代爾毛多由良爾和我於毛波奈久爾

阿之我利乃。麻萬能古須氣乃。須我麻久良。安是加麻可左武。

許呂勢多麻久良。

麻萬能古須氣は、麻萬は、足柄、郡の萬々下の郷と云へ、足柄の竹下と云處の下まて、酒匂川の上まありと畧解まと云り、古須氣は、子菅なり○須我麻久良へ、菅枕まて、薦枕の類なり○安是加麻可左武へ、何の纒賜もむと云の如し○許呂勢多麻久良へ、兒等爲まと手枕なり、と契冲の云るはさることなり○歌意へ、何とての菅枕を纒賜もむ、いざ吾手を手枕まと爲賜へ、兒等よとなり、岡部氏の、許呂勢を子等夫と見て、子等と夫へ、互まと手枕をこそれなり、と云るへ違へり

安思我里乃。波故禰能禰呂乃。爾古具佐能。波奈豆麻奈禮也。比母登可受禰牟。

波故禰能禰呂は、箱根の嶺なり、呂は、添言辭まて、東歌まと殊まと多き言なり、（槿裏抄まと、坂東詞、末まと多くろの字を付る事ありと云るへ、是なり）○爾古具佐能、此までへ花を云む料の序なり、爾古具佐へ、草名なり、格まと箱根草と呼て、品物解まと具、云り

○波奈豆麻奈禮也（舊本、奈の下に都の字あるハ衍なり、又官本にハ、都の字ありて、豆の字なし、）は、花妻なれやハ、花妻にてハなきにの意なり、さて花妻ハ、花は、花物の花にて、實なくあざなる妻をいふにもあるべけれど、さてハ打つけに聞えて味なし、今案に、新婚る婦を、今世に花婦と唱へり、其ハ新〳〵花やぎ希見き由の稱なるべし、此に依て思へば、古へもこの新婚の妻を、花妻と云しにこそ○歌意ハ、新婚の妻にてへなきものを、何とて紐解ぞ〳〵てハ宿むとなり、いと若き女の、初て交接るハ、甚恥〳〵み憚〳〵みするものなれば、か〳〵云るにて、此歌ハ、漸既〳〵婚ひする女の、なほ恥〳〵かりて、紐解がてにまもる時、男のよめるなるべし

安思我良乃。美佐可加思古美。
久毛利欲能。阿我志多婆倍乎。
許知豆都流可毛。

美佐可加思古美ハ、御坂の嶮〳〵て、恐き故にの意なり、御坂ハ、九巻三十二丁足柄坂にてよめる歌に、東國能恐

耶神之三坂爾とあり○久毛利欲能は志多婆倍をいむとての枕詞なり。まづ志多と云へ常は云上下の下の意のみはあらぬ。志多は志努まゝ志那など云と通ひて。匿ひ隠れて。表方はあらはれざるを云言なり。志多と志努と通ふへ。シ。タ。フ。と。シ。ヌ。フと同言なるの如し。又志那と通ふと云へ。匿を。シ。ナ。メと訓るも。シ。ヌ。ピといふ即下延といふも。隠ひ延るよゝなり。さて陰夜へ。物の目もわのび。自隠ひかくるゝ意もて。かくつづけゝるなり。畧解は。己毛利奴能の誤なると云へ。甚偏説なり○阿我志多婆倍乎へ。吾下延をなり。九巻菟原處女をよめる歌は。隠沼乃下延置而とよめり。此下延も此語見ゆ。既く

具云り。吾隠々は通を心を。打出を由れり○許知豆都流可毛へ。言出つる哉なり。故コチデといふ○歌意へ。常も心はのみ隠て。色はもあらはさぬ妹の事を。足柄山の嶮しき坂路の甚恐さは。頻は戀しく思ひ出るあまりは。おもへば言は出して。妹の名をいひつる哉。堪忍ひて。言は出さじとてあるべきのりつるものをとなり。十五三十一丁は。加思故美等能良受安里思乎美故之治能多武氣爾多知豆伊毛我名能里都とあるは。意同ド

相模治乃余呂伎能波麻乃麻

奈胡奈須。兒良久可奈之久。於毛波流留可毛。

相模治ハ。相模道なり○余呂伎能波麻ハ。和名抄ヨ。餘綾郡餘綾。與呂木。延喜兵部省式ヨ。相模國傳馬座。郡。各五疋。今の大磯。驛の東らのあるりなりと云り。本居氏。古今集の歌のてよろきのをよろきなるを。小と書るを。後ヨコと。誤れるもて。なり。然る例なのどの小なり。又小野。小川。或ハ小篠。小長谷。小筑波。小佐保なども皆同じ。此ハ小き由ヨハ非ず。眞御などの類の美ると詞なり。小ハ大と反對ヨて。返て共ヨ美稱とせヨ。

りと云り。今按ヨ。大と小と。共ヨ美稱なる義ハ。大ハそ。の廣大。しして。せヨ巨けく勝れるを稱ていふ詞なれ。べ論なし。小ハそ。の反對なるヨ。これ又美稱とそるこ。とハ。そべて狹小きハ。必品よく物ヨ秀りて。細ヨ精しき謂ヨて。則美ヨ。○麻奈胡奈須ハ。如眞砂なり。濱の白眞砂ハ。美愛き物なれバ。可憐き女をヨとふるなり○兒良久可奈之久ハ。良の下久。字は。元曆本古寫本等ヨ。波とあるもよろし。之の誤寫ヨて。其一トそぢなる事を。重く思ハそる辭ヨて。一トそぢヨ兒等の愛憐思そるゝと謂なり○歌意かくれゝるそぢなし

右十二首相模國歌

多麻河泊爾。左良須氐豆久利。
佐良左良爾。奈仁曾許能兒乃。
己許太可奈之伎。

多麻河泊は、今云多婆川なりとそ、和名抄よ、武藏國多磨郡とある、即其郡の川なり○左良須氐豆久利は、曝手作なり、手作へ、十六竹取翁歌よ、日暴之朝手作尾云々、和名抄よ、唐式云、白絲布、今案、俗用手作布、三字云

想國風土記、武佐志國多磨郡多摩河里人作調布納内藏寮

天都久利乃沼乃、是乎、字鏡よ、紵繡氐豆久利、靈異記中巻よ、尾張、宿禰久玖利者、尾張、國中島、郡、大領也、妻、在同國愛智、郡片絶里之女人云々、織麻細薑而著夫大領薑妹兄比其、國云々、薑氐都九里、などあり、さて此までへ、更々爾といえむさめの序なり○佐良左良爾へ、更々爾なり、更よ更よといえむの如し○歌、意へ、何故よ、又しても更よ更よ、其、女のそこむ〳〵憐〳〵、戀〳〵思へる〻事そとなり

武藏野爾。宇良敝可多也伎。麻

左氏爾毛。乃良奴伎美我名。宇良爾。低爾家里。

武藏は。牟射志と射を濁るべし。今は清てのみ唱れども。ひがごとなり。此下よも牟射志野と書。古事記よも。牟射志國と書り。又藏字を用さるも。濁音の故なり○宇良敝可多也伎へ。十五よも。由吉能安末能保都手乃宇良敝乎可多夜伎豆とよ。矢り。宇良敝へ占なり。まづ宇良と云へ。其事の体言なるを。其宇良の業を爲るとき。波比布閇の言を添て活して。宇良布。宇良敝など云を。又その用言をそ爲て。體言より爲さるなり。例へ歌と云體言を。用言より宇多布とも。宇多比とも云を。又その用言をそ爲て。謠とも。いふが如し。又宇良奈比とも云。奈比もこれと同じ例なり。商をアキナヒ。賂をマヒナヒなどいふが如し。畧解より。宇良敝は。占令合の意なり。敝を衣の如く訓べしと云るへ。甚誤なり。こは古言の体用の格を。深くさどらざりしものなり。又敝を衣の如く訓べしといふも。大誤なり。凡て此等の敝を衣の如く唱へ。後世の音便よりそあれ。古へ本音のまま。正しく敝と唱しなり。可多也伎へ。肩灼なり。武藏野の鹿の肩骨を取て灼て占ふなり。鹿肩骨をやきて占ふへ。皇朝の上古の占法なり。東國の神社の中より今も鹿占の有を

得て東麻呂翁のもさりしへ骨の斑まこのしるなりとそと畧解まに云り古事記まに召天
兒屋命布刀玉命而内拔天香山之眞男鹿之肩拔而取
天香山之天波々迦而令占合麻迦那波而云々○麻左
氐爾毛は眞實まもといふなるべし。テと子と信不所
忘など云信まは眞の言を添さるなり。眞定なりといふ説ハあらず。さら
ハ韻通
べ麻左泥と泥を濁るべき下二十八丁まに可良須等布於保
まは皆清音字を書るをや
乎曾杼里能麻左低爾毛伎麻左奴伎美乎許呂久等曾
奈久とあり○乃良奴伎美我名ハ名告ぞして人まか
くせる君之名なり○宇良爾低爾家里ハトまに出まけ
りなり此下二十四丁まも能良奴伊毛我名可多爾伊氐牟

可母とよめり二卷十三丁大津皇子竊婚石川女郎時津
守連通占露其事御作歌まに大船之津守之占爾將告登
波益爲爾知而我二人宿之とある類なり○歌意ハ眞
實まに名告ぞしてつゝみかくせる君の名も武藏野の
鹿の肩骨を取て灼て占ふ占へまい
ちゝるゝあらをれ出まはけりとなり

武藏野乃乎具奇我吉藝志多
知和可禮伊爾之與比欲利世

呂爾安波奈小布與。

乎具奇我吉藝志ハ小岫之雉なり。岫は和名抄ニ陸詞云岫山穴似袖和名久木とあり。名の意は泳なり。クリハキ。小の言をそへ〳〵るハ小嶺小野などの例の如し。

さてこの小岫ハ秩父山の方ニ付て有ニや考ふべし。契沖ハ書紀顯宗天皇巻ニ或本ニ云弘計天皇之宮有ニ二所焉一宮ニ於少郊ニ二宮於池野ニとあるを引て宇書ニ野外曰郊トとあれバ此心ニよて武藏野の小野といふてゝろなるべしと云り。考ふべし。書紀の少郊ハ地名なり。郊をクキとよむハ。さて此レまでハ立別といをむ料の序なり。由あるか。

十二一四十丁

ニ足檜木乃片山雉立往牟君爾後而打四雉目ハ方とよめるニ同じ意のつゞけなり。雉ハ曉方ニ。志めをとり〳〵所をあわゝ〳〵鳴て立別れ往ものなれバかくつゞくるなり。世呂爾安波奈布與ハ夫ニ不逢事ニと云ゞ如し。不逢を安波奈布安波奈敝婆など云ハ東語の活用体なり。與ハ歎息の聲なり。歌意かくれゝるもぢなし

古非思家波素氐毛布良武乎。

牟射志野乃宇家良我波奈乃。

伊呂爾豆奈由米。

古非思家波は戀〳〵有ばの意なり○宇家良我波奈乃ハ术之花之よて色をいとむ料なり此下二十六丁よ安齊可我多思保悲乃由多爾於毛敝良婆宇家良我波奈乃伊呂爾氐米也母とよめり色といふのみよ係ヲて莫出といふまでよは關らぞ末採花の色よ出めやなどよめるさぐひなり宇家良ハ品物解よ具云り○伊呂爾豆奈由米は努々色よ出ること莫れの意なり○歌意ハさのみ戀〳〵おわさむ時ハこれ袖振ヲてなりとも そこの意をなぐさめむそゆめ〳〵色よ顯出て人よ知るゝことなのれと云る男の歌なり 畧解よ戀〳〵き時ハ吾ハよそ人を思ふ如〳〵て袖振事も有むをそれを見て心よハ思ふとも色よ顯をに ことなのれといふ女の歌なり さて次のを男の答と見ゆと云るハいみ〳〵きひごことなり

或本歌曰。何可爾思氐古非爾低受安良牟。波可伊毛爾武藏野乃宇家良我波奈乃伊呂良爾

歌意ハいのよ〳〵て妹を戀〳〵思ひさらべか色よ出ぞ〳〵てあらむとよもか〳〵よも色よ出さびてハ得堪

と

なり

武藏野乃。久佐波母呂武吉。可毛可久母。伎美我麻爾末爾。吾者余利爾思乎。

久佐波母呂武吉は。草葉諸向なり。此方へも彼方へも。依向ふを云り。諸へ。諸手諸足などいふ諸なり。さて彼

も此もといそむ料の序とせり○伎美我麻爾末爾は。九巻二十九丁。死毛生毛君之隨意常念乍有之間爾。二十巻六十一丁。伊蘓能宇良爾都禰欲比伎須乎乎之杼里能。乎之伎安我未波伎美我末仁麻爾。などあるに同じ○歌意へかるもかくるも。君の任そと。身を委ねて依る物を。今更何の疑〳〵異〳〵き意のあらむとなり

伊利麻治能。於保屋我波良能。伊波爲都良。比可婆奴流奴流。

和爾奈多要曾禰。

伊利麻治ハ入間道なり。和名抄ヨ。武藏國入間郡（伊留末）とあり。伊勢物語ヨ。昔男武藏國までまどいありきけり云々。住處なむ。伊留麻郡三吉野里なりけるとあるも同じ。かく伊留麻とあれども。古ハ伊利麻と呼しヨこそ。○於保屋我波良ハ。大家之原なるべし。和名抄ヨ。武藏國入間郡大家（於保介也）とある地ならむ。（高田與清ぉ擁書漫筆ヨ。）武藏演露ヨ。入間郡部ヨ。今の大在家村ハ。その郷名の轉れるヨて。おゝやけ河原ハ此所ならむと云り。同書ヨ。入間郡の村名大谷木（おゝやぎ）などあるも共ヨ音通へバ。いづくとも定がたけれど。武藏國圖を閲るヨ。大谷木ハ河邊の里ならねバ。これヨハあらじと云。これハ我波良を河原と見たるよりの説なり。いのヨまれ我波良ハ之原ヨて河原ヨハあらざるなり。現存六帖ヨ。明珍法師。日のくれヨおゝやゐの原を分行ハすゐのもゐのあさヨくひなゝくなり。○伊波爲都良ハ。蔓草と見えたり。此草の事未考得ず。下ヨも見えたり。擁書漫筆ヨ。伊延蔓の義と釋たるハ論ヨ足ず。波爲と波比と假字違へるをざヨいゐの。○比可婆奴流奴流とハ。比可婆でおもをざりけむハ。蔓草の方ヨ付て云るヨて。引時ハ靡依意なり。奴流奴流ハ。柔軟ヨ靡依貝なり。下二十六丁ヨ。安波乎呂能乎呂田爾於波流多波美豆良。比可婆奴流奴留安乎許等奈多延とあり。○和爾奈多要曾根ハ。吾ヨ絶ることなく

あれこ〳〵と希ふなり○歌意は柔軟に靡依て、いつまでも吾に中絶る事なくあれこ〳〵となり

和我世故乎。安杼可母伊波武。
牟射志野乃。宇家良我波奈乃。
登吉奈伎母能乎。

安杼可母伊波武は、何この將云にて、母は歎息辭なり○宇家良我波奈乃は、これも時無といふまでにはかゝらぬ時といふにのみ係れる序なり、木花は夏開もの なれべなり○歌意は、吾夫子を愛〳〵思ふ心は、何時と定りさる事もなく、常に戀〳〵思ふゝ物を、吾夫子を何にさと〳〵て、何とのいそむそ、さてもなつこの〳〵き事そ

となり

佐吉多萬能。津爾乎流布禰乃。
可是乎伊多美。都奈波多由登

毛許登奈多延曾禰。

佐吉多萬ハ和名抄ニ武藏國埼玉佐伊太末郡とある是なり吉を伊と云るハ音便の訛なり　○津ハ此郡ハ海ニよらざれバ利根の大川の船津なるべしと云り○歌意ハ埼玉の大川の船津ニ堅く繫き留めさる船の風ゐつよく吹ニよりてふとひその綱の斷離るゝ事ありとても吾堅く約り結べる中なれバいつまでも努々言問の絶る事なゐれ

となり

奈都蘓妣久宇奈比乎左之氐。

等夫登利乃伊多良武等曾與。

阿我之多波倍思。

奈都蘓妣久ハ枕詞なり上ニ出つ○宇奈比ハ地名なり海邊といふ説ハ甚非なり凡て古ヘ海邊をウナヒと云ることかつてなし海邊をベウミヘとのみこそいひしれ既く一卷ニ具云るゐ如し披見て考べし　この地何處ニあるにや未考得ず攝津國ニも荒原といふ地あり同名なり　○等夫登利乃ハ飛鳥の

飛て到著如〳〵到らむの意のつゞけまて此までハ序なり○伊多良武等曾與ハ將到とてそなり余ハ歎息の聲なり○阿我之多波倍思ハ吾之下延〳〵なり下延ハ隱々ゝ聘をるをいふ既〳〵具注り思ハ過〳〵方のことをいふ辭なり○歌意

かくれさるそぢなゝ

右九首武藏國歌

宇麻具多能。禰呂乃佐左葉能。

都由思母能。奴禮氐和伎奈婆。

汝者故布婆曾母。

宇麻具多ハ和名抄ゝ上総國望多郡とあり末宇太さて末宇太とあるハ後ゝ字ゝつきて唱誤れるゝて古ハ字も馬來田とかきて此の如〳〵宇麻具多と呼〳〵なり書紀繼體天皇卷ゝ馬來田皇女あり又天武天皇卷ゝ大伴連馬來田とありて十二年六月丁巳朔己未大伴連望多麿とあるゝ依ておもへバ望多と書るをも元

はウマグタと呼へしなり○都由思母能ハ本居氏云都由思母爾といえで能と云るハ露霜ゆ濡てといふふのらびし篠葉ゆ露霜の置さる如し濡ての意なり○奴禮氐和伎奈婆ハ濡而吾來なばなりさてこの來ハ行と云の如しいづくゆまれその行方を内よして行奈婆と云ぞして來奈婆と云るなり○汝者故布婆曾母ハ汝は戀むそといふやと契冲云り○歌意ハ涙ゆ濡て吾別行なバ汝ハ家ゆ留居て吾を戀しく思えむそさてもなごりをしやといへるよや旅ゆ行別の時の歌なるべし

宇麻具多能。禰呂爾可久里爲。
可久太爾毛。久爾乃登保可婆。
奈我目保里勢牟。

禰呂爾可久里爲は嶺ゆ隱居なり○可久太爾毛ハ如此てさへもといえむの如し○久爾乃登保可婆ハ國の遠さからびなり○歌意ハ望多の一嶺ゆ隱れ居つつ如此てさへもいと家戀しく思えるゝを彌國遠放

りなべ。幾許(イクバク)の妹ぞの目を見まゝ欲せむといふなるべし。第三第四の句の間へ。言を添て意得べし。聊いひゝらえぬやうなれど。右の意ならでハ解(注)がゝし。此歌も。上のと共ゝ旅行の歌ゝて。望多嶺の彼方ゝなれるゝとよめるなり

右二首上總國歌

可都思加能(カヅシカノ)。麻末能(マノ)手兒奈手(テコナヲ)。

麻許登(マコト)登可(トカ)聞(モ)。和禮爾(ワレニ)余須等布(ヨストフ)。

麻末乃(マノ)氏(テ)胡奈手(コナヲ)。

麻末乃手兒奈(マノテコナ)ハ。既〳〵三巻ゝ出て。彼處ゝ具注り。或説ゝ上總ゝて八今も末の弟子をてこと云ひてのの兒のをを畧きゝるなり。又遠江ゝてハ。弟子をほての子といひ。何ゝても終りをゝてといへり。志のれバいと末ゝ生れゝる女子をてこなといふべき事知べし。と云りをて子の畧といふハ。意得ぬことなり。○和禮爾奈須等布ハ。吾ゝいひ依るといふなり。これと手兒名と通婚ゝし。人の言依といふと云なり。契沖ハ。古の眞間の手兒名ハ。名高きかゝよき人なるを。まことゝやゝ我を

そのてこなまよせていふへとなり。女の歌なり。さるこのをよき人まよそへていふへまてとのこゝろならべ。われをふろくおもふらむと。さのむなりと云り。本居氏も此考まよれりと見えたり。されど志のあはら倶三巻赤人歌まよ古昔有家武人之れ云々松之根也遠久寸とあり。眞間の手児名へいとをる上の後まよ集れ代の人と見ゆるまよ此十四巻も赤人よりふねまよ人べ手兒名ぞ現在時の歌とおもをれ又今の歌もこのらびとも風ないふべ彼娘子へいとせ名高くいて人れ

○歌意へ葛飾の眞間の手

兒名を吾と通婚（シヒアフ）よ一人の言よにといふへ眞實（マコト）よや。

さやりよきけべ。さてもいよ〳〵彼女のなつの〳〵

思をる〻事哉といへるなり。其世よも。かの手兒名を

へ人の娶（エ）ごてよもつめれべ。志の言よせらる〻をも

下よへほこれ

る情あるべし

可豆思賀能（カヅシカノ）麻萬能（マノ）手兒名家（テコナガ）。

安里之可婆（アリシカバ）麻末乃於須比爾（マノオスヒニ）。

奈美毛登杼呂爾。

家字ハ我の寫誤なるべし。但し東語ヨ之を家とも毛波奈久爾又二十丁和家世ひしの此下十丁ヨ家ヨ和家自又於い二十九丁兒呂家可奈門欲ど見えさり二十四丁多家波皆我といふべき所なれば解と濁音ヨこそ通べされど言べきを家の清音字を用ひる。ハ多籠良家又五巻十五丁ヨるなり。且二巻三十一丁ヨ八ハ丁和家夜度能などあるも。和家曽乃乃又十六丁十八丁和家夜度能などあるも。我の誤なることとりつなければ共ヨ誤字とすべし。○麻末乃於須比爾ハ眞間之磯邊ヨなり。○奈美毛登杼呂爾ハ浪も動響ヨなり。瀧も動響ヨ宮も動響ヨなどいへるゴ如し。○歌意ハ眞間の手兒名ゴ眞間の磯邊ヨ立てありしのベ打依る浪も響きとゝるまでヨ。其姿のうるハしきヨめでて人の多く來より集ひさゝきしといふならむ。畧解ヨ手兒名ゴ磯邊ヨ在しのベ浪さへめでゝさゝきしといふならむと云るハあらじ

爾保杼里能可豆思加和世乎。

爾倍須登毛曽能可奈之伎乎。

刀爾多氐米也母。

爾保杼里能ハ枕詞なり。鵡鷸の潛といふ意よかゝれるなり。四巻ヨ二寶鳥乃潛池水と有をも思ふべし。○可豆思加和世乎ハ葛飾早稲をなり○爾倍須登毛ハ新饗を爲ともなり。爾倍ハ新饗の約りゝるまで。新稲を以て饗をするを云。袖中抄十六ヨ葛飾わせとハ下総國ヨ葛飾といふ所あり。其處の早稲を云なり。爾倍をともとハ田舍ヨ始て早稲を刈て物〳〵て。里隣の者集て食をべ。ふへをと云なり云々と云り○刀爾多氏米也母ハ外ヨ令立めやハなり。也ハ也波の也。母ハ歎息辭なり。十五三十七丁ヨ爾之能御馬屋乃刀爾多豆良麻之

○歌意ハ葛飾早稲の新饗をする時ハいみ〳〵忌慎て。門をも閉て。外人を堅〳〵入ぞされども愛憐と思ふ男の來なべ。門外ヨ立せてハおきゝらじ。必内へてそ入めとよめるなり。本居氏云。家持家集と云物ヨ。我宿の早田刈あげて爾倍をとも。君ぞ使をゝゞヨハやらじとあるハ。今の歌をなはしゝるものなり。さてもとハてせしことなり。又後世ヨハ。もハら神ヨ祭る事とのみ思ふめれど。然ヨ非ぞ。神ヨも奉を。人ヨも饗。自も食ゝざなり。贄苞苴。牲なども。本此新饗より轉りゝる名なり。書紀ヨ。天稚彦新嘗休臥とあるハ。爾比那閉ハ。上下なべてをるゝざなること。上ヨ云る如くなれべ。天稚彦も去つるなり○袖中抄ヨ。贄楯。贄殿などいふハ。多くハ魚ヨつきて云。飯をる所をべ。大炊殿といふなりとなれど。似ゝる事なれべ。くひ物をヨへといふなり云るハ。本義を失へり。まどふべのらば。下相聞ヨ。多禮曾許能屋能戸於曾

常陸風土記
古老曰昔祖神尊巡行諸神之所到駿河國福慈岳卒遇日暮請欲寄宿此時福慈神答曰新粟初嘗家内諱忌今日之間冀許不堪於是祖神尊恨泣言曰即汝親何不欲宿汝所居山生涯之極冬夏雪霜冷寒重襲人民不登飲食勿奠者更登筑波岳亦請容止此時筑波神答曰今夜雖衆賓不敢不奉尊貴矣設飲食敬拜祇兼於是祖神尊歡然語曰愛乎我胤魏哉神宮天地竝齋日月共同人民集賀飲食富豊代々無絶日々彌榮千秋萬歳遊樂不窮者是以福

夫流爾布奈未爾和我世乎夜里氐伊波布許能户乎とある爾布奈未も新嘗なり此ハ其村の里長の或ハ郡家のまて新嘗祭を行ふ時其村の民どもの集るを云るなり さて夫をさる新嘗祭よやりて後家よ留居る妻子などの家户を閉て いみ〳〵慎み齋るまて古稲穀を重み〳〵るさま思やるべし まる常陸風土記よ富士の神筑波の神の御祖神國巡せに時よ日くれて富士神よ宿を請給へるよ 新嘗の祝なりとて入〳〵め給へば筑波神よ請給へべ 今夕ハ新嘗なれども 御祖よ坐ば など宿〳〵參せざらむとて 入〳〵め給へる事あり 思合

べし

安能於登世受。由可牟古馬母
我可都思加乃。麻末乃都藝波
思夜麻受可欲波牟。

安能於登世受ハ 足之音不爲なり 字鏡よ 跣阿奈於止 足之音なるべし 跣字をよめるハ心得ぬ 七十一番職人歌合よ 暮露いと

慈岳常雪不得登臨其筑波岳徃集歌辭飲喫至于今不絶以下略之

ふなよかよふ心の馬ひどを人の聞べき足の音もなし○歌意は足の音せぬ容々は行む駒もがなあれこしさらば真間の繼橋をひそのまとりて常は止び妹許通をむをさる駒のなきぞせむ方なしとなり

右四首下総國歌

筑波禰乃禰呂爾可須美爲須宜可提爾伊伎豆久伎美乎爲

禰氏夜良佐禰

第一二句は過難といえむ料なり筑波嶺は霞の深く居塞をて過行晴難きよしのつゞけなり○須宜可提爾は行過難なり思ひを過し難き意なり非ぞ此下十四丁は可美都氣努伊可抱乃禰呂爾布路與伎能遊吉須宜可提奴伊毛賀伊敝乃安多里とよめるは同じ○爲禰氏夜良佐禰は率寢て行賜へよといふの如し行は往なをといふ意はきくべし夜良佐は夜良勢といふ意なるを禰の辭は連けるの故は勢を佐は轉しいへるなり禰は希

望辭とて志の〳〵せよと希望ふ意の辭なり既〳〵一
巻上十五丁より委云り此下十八丁より伎波都久乃乎加能久
君美良和禮都賣杼故爾毛乃多奈布西奈等都麻佐禰
とあるも同じ○歌意ハ女の家のあたりを行男の息
づきて過難ようるを侍婢の又ハさらぬかたへの女
などの見て いで内より引入て率寢て行し賜へよとい
へる
なり

伊毛我可度伊夜等保曾吉奴。

都久波夜麻可久禮奴保刀爾。
蘓提婆布利氐奈。

伊夜等保曾伎奴ハ彌遠除ぬなり○歌意かくれさる
をぢなし此ハ旅などより出立行人の やゝ家遠くなれ
る間よよめるなるべし筑波山より妹ゞの家
のかくれざる間より急く袖を振むとなり

筑波禰爾可加奈久和之能禰

乃未乎可。奈岐和多里南牟。安布登波奈思爾。

可加奈久は、鷲の聲は、かく〳〵といふごとく、鳴物なれべいふなり、書紀よ、相摸、海よ覺賀鳥の鳴〳〵と云るもこゝよて、其聲を覺賀とは書〳〵ものなりと岡部氏いへり、和名抄よ、文選蕪城賦云、寒鴟嚇雛、嚇讀加々奈々とあるハ、今の歌の可加奈久といさゝうに異をり　○歌意、第一二句ハ序よて、相見ると云時ハなしに、いつも音よのみ泣て、長き月日を戀〳〵思ひて、經度りなむ

このとなり

筑波禰爾。曾我比爾美由流。安之保夜麻。安志可流登我毛。左禰見延奈久爾。

安之保夜麻、此まてハ悪といえむ料の序なり、この山ハ常陸、國よりて、筑波〳〵よりハ北よあゝれり、常陸、國

風土記ニ。新治郡云々。自郡以東五十里在笠間村。越通道路稱葦穂山。古老曰。古有山賊。名稱油置賣命。今社中在石屋。○歌意ハ。女の容儀ニ。何一ツ惡(アシ)このる咎も。さらニ見えざることなれバ。吾ニつれなきのみ〳〵ちをしきことなれバ。もし女の身のうへニ。惡(アシ)といふべき難(トガ)のあるならバ。なほさるこのさニ。思ひゆるさるべきをとなるべし。畧解ニ。その男ハ。姿も心も。惡といふべき咎も見えざる故。心ニつけるよし。女のよめるなりと云へどもし。源氏物語蜻蛉浮舟のうせまし後の事を云る處ニ見るニえることなるとごの。侍らぞなどして。こゝろやそらうらうしと。おもひ侍つる人の。いとたこのなくなり。

侍ニけるとあるも。その人のらニことニ難(トガ)むべきそぢのなのりしを云るなり

筑波(ツクハ)禰乃(子ノ)。伊波(イハ)毛(モト)等杼呂(ドロ)爾(ニ)。於(オ)都流美豆(ツルミヅ)。代(ヨ)爾(ニ)毛(モ)多由(タユ)良(ラ)爾(ニ)。和(ワ)我(ガ)於(オ)毛(モ)波(ハ)奈(ナ)奈久(クニ)爾(ニ)。

於都流美豆ハ。常陸國風土記ニ。茨城郡信筑(シヅク)之川。源出自筑波之山。從西流東。經歷郡中入高濱之海とある。こ

の源水なるべし。又筑波嶺のみねより落るみなの川とあそだしさるも。此水流よりや○多由良へ。上より出さる多欲良より同じ。彼處より云り○我字。舊本より家と作るへ誤なるべし。今ハ古寫本拾穗本等より從つ○歌意へ。動揺と漂蕩いて。心を定めぴ。末おやつのなく云べてそあらめ。さへなくして。世よさしのにかさし吾思入ることとなるより。今更より何をの疑ひ思ふらむといふ意を。含めさるなり。○六帖より。つくねのいそもとゞよ逢ぞしてとよめるは。今の歌と。十巻なる。六月之地副割而照日爾毛の歌とを。暗よおゑあやまり。混よなしさるものなり

筑波禰乃。乎氐。許能母爾。毛利敝須惠。波播已毛禮杼母。多麻曾阿比爾家留。

毛利敝須惠へ。守部居なり。此までハ。守をいとむ料の序なり。獵師の鹿猪をかるとて。筑波嶺の彼面此面より。守部を居置て。守らぴるよしのいひこのけなり○波播已毛禮杼母へ。已字は。巴の誤なるべしと或說より云り。

ハ。ハモレドモと訓べし。母者雖守なり○多麻曾阿比爾家留ハ。魂を相よけるなり。心の相協ふよしなり。既く出さる言なり○歌意かくれさるもぢなし。女のよめるなるべし

左其呂毛能。乎豆久波禰呂能。夜麻乃佐吉。和須良エコバコ延許波古曾。那乎可家奈波賣。

左其呂毛能ハ。眞衣之といれむの如し。こゝに緒著といひ係さる枕詞なり。緒ハそなたち紐のことなり。古ハ。緒といひ紐といひ。紐緒とも云て。皆ひとつなり○乎豆久波ハ。小筑波なり。乎ハ。小泊瀬などいふ小なり○歌意ハ。旅などよりて行人の。筑波山の岬を通り行間よめるよりて。妹の事を忘られて來なばこそ。汝を懸ずて有なめ。得忘れぬの故なこそ。懸て慕へとなり。

懸ハ。心より懸るなり。本居氏の。懸ハ。言よかけて云出るなりと云るハ。かさよれり

乎豆久波乃。禰呂爾都久多思。

安比太欲波。佐波太奈利努乎。
萬多稱天武可聞。

稱呂爾都久多思ハ。嶺ヨ月立なり。立を多思と云ること。東語ヨ多〳〵。さて月立ハ。嶺ヨ月の立登るをいいて。さて兼さる下の意ハ。月頃の歴〳〵事とせるなり。山嶺ヨ月の登るを立といへる例ハ。七巻ヨ具云り。○安比太欲波ハ。太ハ之の誤ヨて。逢〳〵夜ハなるべ〳〵と源嚴水の云り〳〵は。信ヨさることなり。もとのまゝヨて。間夜者とする説ハ。ろ〳〵○佐波太奈利努乎太の下。古寫本拾穂本等ヨハ。爾字あり。は。多ヨ成ぬるをなり。畧解ヨ。太ハ爾の誤なるべ〳〵といへれど。おのらず。佐波太ハ。此上ヨも出さり○歌意ハ。逢見〳〵夜よりハ月日立て。漸多〳〵程經ぬるを。かゝてハ又も相宿をべ〳〵や。絶てやせむ。さてもあやふ〳〵やとなり。畧解ヨ。此嶺ヨ月のみえ多〳〵なれるをいふと云るハ。間夜と見さる故ころ〳〵。又ねろヨ月立ハ。さゞ月頃の經ることをいをむさめヨ云るのみなること。上ヨ云さるぞ如〳〵

乎都久波乃。之氣吉許能麻欲。

多都登利能。目由可汝乎見武。

左禰射良奈久爾。

之氣吉許能麻欲ハ。繁木際從なり。從ハ乎と云ふ通へり○多都登利能ハ。目といたむゝめの序なり。目とかのれるハ。鳥の群といふ意よつゞけゝるなり。群を米と云ることハ甚多〳〵。契沖が。繁き木際より立鳥ハ。さ〳〵も見ぬなりと云ふのゝも見えぞ立物なれば。久るハ。きゝとりぞゝ〳〵○目由可汝乎見牟ハ。目ゝ耳汝を見むこのとなり。由は爾といふゝ同意なり○左禰射良奈久爾ハ。左宿なゝまゝて。左宿ぬ事なるゝの意なり。ゝゞ奈久爾と云べきを。射良奈久爾といふ類ハ。後世の語ゝ。怪〳〵かるといふべきを。怪〳〵からぬと云ふ同じ。猶この古言の例ハ。既〳〵一巻ゝ具云りき○歌意ハ。汝と共ゝ寢〳〵事のあらべこそあらめ。相宿もせぬ事なるゝ。ゝゞふそ目ゝのみ見て。かゝるこのり戀〳〵思ひつゝあらむこのとなり

比多知奈流。奈左可能宇美乃。

多麻毛許曾。比氣波多延須禮。
阿杼可多延世武。

奈左可能宇美ハ、常陸國行方郡よあり、後よ浪逆と書
ヒ。○比氣波多延須禮ハ、引ハ根の斷て絶それとなり、
此下二十四丁よ、楊奈疑許曾伎禮婆伴要須禮余能比等乃、
古非爾思奈武乎伊可爾世余等曾、とよめるとハ、表裏
なり○阿杼可ハ、何歟なり○歌意ハ、浪逆の海の玉藻
こそ、引バ根の斷て絶る物なれ、藻ならぬ吾なれバ、何

とての中絶る事
のあらむとなり

右十首常陸國歌

比等未奈乃。許等波多由登毛。
波爾思奈能。伊思井乃手兒我。
許登奈多延曾禰。

波爾思奈ハ、和名抄ヨ、信濃國埴科、波爾志奈郡とあり○伊思井乃手兒ハ、石井の娘子なり、石井ハ地名なるべし、此地未考ぎ、手兒とは、母の手よあるよしよて、いと幼稚兒を云り、こゝハさる謂よハあらねど、母の稚兒を稱ごとし、娘子を愛て云るこ、又ハ妙兒の義よても有べし、タヘハと切る、集中ヨ、色妙之兒ともよめり、手兒をはての兒、又愛兒の意といふ説ハとらぢ○歌意ハ、他人等と云交しさる言ハ、後ヨ變ひて絶果ぬともよしやさてあるべし、石井の娘子と堅く約りむそびさる言ハいつまでも努々絶る事なのれよとなり

信濃道者。伊麻能波里美知。可里婆禰爾。安思布麻之牟奈。久都波氣和我世。

伊麻能波里美知は、新之治道なり、十二三丁ヨ、新治今作路とよめるヨ同じ、伊麻ハ、新來、新參などの新なり、治道ハ、坂士佛ぢ、大神宮參詣記ヨ、そゝきかるこのやの絶間ヨ、かりぢね多き治道ありとあり○可里婆禰ハ、竹

木などの苅株なるべし。岡部氏ハ苅許根なり。許ハ場といふ言の本なりと云り。いらむ　○安思布麻之牟奈ハ足蹈をなといふよ同じくて。足蹈給ふことなこれの意なり。本居氏玉勝間云。古語よ人の事を中昔さふとみて行をゆのに立をさゝになど云るを。さゝせ給ふなどいひ記録ふみなどよとよへハゆのせ給ふ。令行給。令立給。などいふてよとはふるくハ見えざることなるよ。萬葉十四の歌の頃の歌。佗をみなあしふまになと云る例なり　按。かの集よ。此下上野國歌よ。伊香保呂爾安麻久母伊都藝可奴麻豆久比等登於多波布伊射禰志米刀羅と。あるも。禰志米ハ令宿といふことよハあらで。寢給へと云ことこきこえさり。されバ今の布麻之牟と同格なり。行を由可須。立を多々須といふハ常なるを。そを重び用ゝて。行志牟。立志米など。やうよも。いひゝことのあり。なるべゝ。○久都波氣和我世都。宇。古寫本よ豆と作るハわろし。は著履吾兄なり。○歌意ハ。續紀よ。文武天皇大寶二年十二月壬寅。始開信濃國岐蘇山道と見えて。其後元明天皇。和銅六年七月戊辰。美濃信濃二國之堺。徑道險阻。往還艱難。仍通吉蘇路とあり。此ハ大寶二年よ。新よ吉蘇路を開のれつれど。なほこゝかゝの古道をも往還あり。を。其後十年餘を經て。和銅六年よ。吉蘇路をのみ通ハゝめゝといふなるべゝ。さて今の歌ハ。其間のの吉蘇

の新墾道を通て、物へ行人よ、よみておくれるよて、そ
の刈株よ足ふみ傷ひ給ふことなのれ、履をきて、よく
〜て無恙行せ給へ
と云るなるべ〜

信濃奈流知具麻能河泊能左
射禮思母伎美之布美氐婆多
麻等比呂波牟。

水曽路記云塩田の町家七十許町の出口の川を筑摩川と云名所なり大河なり小橋をとゝせり此川北へなゞれ上田を通り川中島をめぐり善光寺の半里ときをなゞれ越後高田よ出て海へ入ると云々

知具麻能河泊へ、和名抄よ、信濃國筑摩郡豆加万國府とある。この郡よある川なるべ〜。豆加万とあるへ、後の唱よて、元へ此の如く、知具麻とそいひけむ。扶桑畧記よ、光孝天皇、仁和三年七月廿日、信濃國大山頽崩、山河溢流、六郡城廬拂地漂流、牛馬男女流死成丘云々、これ筑摩川なるべ〜。さてこの川、佐久郡金峯山の陰よ出るよ〜、信濃地名考よ見ゆ、新續古今集よ、君ゐ代へ千隈の川のさゞれ石の、苔むそ岩となりつ〜そまで、雪玉集よ、水の上よ降もつもらべ千隈川、さゞれや峯の雪よおよむ、風雅集よ、順徳院、千隈川春行水へそみよけり、消てい〜この峯の白雪○

左射禮思ハ細石なり○伎彌之布美氏婆は君ゐ踐さらべまて之ハその一そぢなる事を重〳〵思ひる辭なり踐ハ踐て渡るよ〳〵なり四巻ま挾穂河乃小石踐渡とよめり○多麻等比呂波牟ハうつ〳〵き君ゐふみさらべ玉とおもひて拾ひむとなり多麻等の等ハ空穂物語俊蔭巻ま紅葉の雫を乳房となめつゝありふるま云々とある等と同格なりと本居氏云り拾を べ古ハ比里布とのみ云り ひろふといふハ今京已來の言なり 然るを こゝまの〳〵あるハ東語まハ古より比呂布とも云〳〵 まこそ○歌意ハ兼てハ思ひ落〳〵めてあり〳〵筑摩川の細石も愛〳〵き君ゐ足まて踐さらべ一そぢま貴き玉と思ひて拾ひ舉むとなり人を愛〳〵み思ふ心の深き不とを示〳〵

さるなり

中麻奈爾宇伎乎流布禰能許

藝氏奈婆安布許等可多思家

布爾思安良受波

中麻奈ハ、地の名なるべし。未考得ず。岡部氏ハ、中麻奈ハ、潮よりても河よりてもいふならむ。眞な中といふを、下上よりて其國ハあらぞと云ふ。又中眞中の事よりも有べし。地名よりれどいのゞ。按ずるに、麻奈ハ、もと志麻とありけむを、顛例へ、佐ひよ志字を奈よりて誤寫せるならむ。中志麻ハ、和名抄よ、信濃國水内郡中島、奈加之末とある是なり。即今の河中島これなり。其地ハ、信濃八郡の水のつき會處なるよりて、其島と云て、海津の名負る多きよし。信濃地名考よ見えたり。但し其説よ、今の歌を引て、古への中麻奈の地名轉りて、中島となりたるなるべしといへるハ、かゝつのなし。さらバ此一句ハ、中島の河津よといふ意よきゝべし。中島の河津よかゝりて、河よ浮居る船のといふ意よつゞきたるなるべし。○歌意かゝれたるそぢなし。此ハ船より旅行人の、中島の河門よて、船よそひそるゝと、留れる妻の別を惜てよめるなるべし

右四首信濃國歌

16
125
96